

浄土の開示

「信巻」信樂釈の考察

山 高 秀 介

はじめに

親鸞は、『大無量寿経』下巻の本願成就文をもって、『教行信証』の骨格とし、自らに証しされた仏道を、浄土真宗として表している。それは、我が身に本願が成就するという仏道であり、浄土教というものが、群萌に開かれた大乘の自覚道であることを明らかにしている。即ち、如来の本願によって、どんな人にも仏道が成り立つという道理を推求したのが、『教行信証』である。『教行信証』は、どこをとっても本願の成就が説かれているが、とりわけ、「信巻」は、本願成就による信仰主体の誕生を主題としている。その様な信仰主体の確立の事実を歴史上に求めれば、天親の「我一心」に見出すことができる。親鸞は、天親の『浄土論』を「一心の華文」として取りあげ、重視している。天親の「我一心」に、歴史的事実としての本願の成就を見出し、その一心の根源として、本願三心を推求していったのが「信巻」三心一心問答である。

それは、どこまでも衆生の立場に立つて衆生を救済しようとする如来の願心の用きを、親鸞が一心の成就に立つて根源に遡る形で推求したものである。

特に仏意釈では、我一心と本願三心の呼应性が推求される。まず、至心釈では、『大無量寿経』勝行段と『観経疏』散善義を通して、名号に帰した回心懺悔の体験が、如来の眞実心と出遇った深い懺悔として了解され、信の根源的主体が法蔵菩薩であることが示されている。そして、如来の眞実心の次に感得されるのが、如来の大悲心（信樂）である。親鸞は信樂釈において、至心釈と同じく法蔵菩薩の願行の自証を表白している。そこには、衆生の無有出離之縁と一つになった如来の大悲のはたらきの感得があつたに違いない。さらに、大悲心は、「必^ス成^ル報^ニ土^ノ正定之因^ト」と述べられる。そのことは、信樂が、機の自覚であるだけでなく、浄土を開示することを示している。今回は、このような「信巻」信樂釈における、親鸞の大悲心の推求を通して、本願成就の仏道がい

なるものであるのかを考えて行きたい。

一 信樂釈における懺悔

親鸞はまず、信樂について、至心釈を踏まえた上で、

次言「信樂」者、則是如來、滿足大悲圓融無碍、信心海^{ナリ}是^ノ故^ニ疑蓋^ニ无^シ有^{コト}間雜^一故^ニ名^ク信樂^一即^ニ以^テ利他回向之至心^ヲ爲^ニ信樂ノ體^ト也
 (『定本教行信証』一二〇頁)

と述べる。このように、信樂とは、名号に帰して如來の眞実心が自証されたとき、そこに覚知される如來の大悲願心である。それでは、信樂の願心を自証した親鸞の体験とはいかなるものであろうか。そのことを示しているのが、続く親鸞の懺悔の表白である。

然^ニ從^ニ无始^一已來^タ・一切群生海流^ニ轉^シ无明海^ニ沈^ニ迷^シ諸有輪^ニ繫^ニ縛^セラレテ衆苦輪^ニ无^シ清淨ノ信樂^一法爾^トシテ无^シ眞實ノ信樂^一是^ラ以^テ无上功德難^ニ巨値遇^シ最勝ノ淨信難^ニ巨獲^ト得^シ
 (『定本教行信証』一二〇―一頁)

これは、善導の「無有出離之縁」という機の深信の内実であらう。親鸞は、さらに、

一切凡小・一切時^ノ中^ニ貪愛之心常^ニ能^ク汚^ニ善心^ヲ瞋憎之心常^ニ能^ク燒^ク法財^ヲ急作急修^{シテ}如^クスレドモ三炙ハラフカニ頭燃^ラ衆名^ク雜毒雜修之善^ト亦名^ク虚假諂偽之行^ト不^ル眞實ノ業^ト也、以^テ此^ノ虚假雜毒之善^ヲ欲^{スル}三生^ト无量光明土^ニ此必不可也

浄土の開示(山高)

(『定本教行信証』一二二頁)

と述べて、自らの浄土への往生を「此必不可也」と否定し、懺悔している。そして、この往生の否定による無有出離之縁の信知は、因位法蔵菩薩の願行の自証の表白となる。

何^ヲ以^テ故^ニ正^{シク}由^テナリ^下如來行^{タマフシ}菩薩ノ行^ヲ一時^キ三業ノ所修乃至一念一刹那^モ疑蓋^{无^キニ}中^ニ雜^{コト}上^ニ
 (『定本教行信証』一二二頁)

このように、どこまでも往生を否定せざるを得ない機の深信と感応するのが、因位法蔵菩薩となって衆生のために修行したまう如來の大悲心である。

二 如來の大悲心

このような如來の大悲心の衆生へのはたらきかけを、曾我量深は、衆生の「無有出離之縁」と如來の「無縁大悲」の感応として表現している(「本願の仏地」『曾我量深選集』第五卷・弥生書房・三三〇―一頁参照)。信樂釈において表白されているような、絶対に救われないという群萌の事実、如來は大悲共感したまうのである。どこまでも「群萌と共に」というところに如來の大悲がある。如來の大悲は、大いなる悲しみとして我が身に成就する。それが衆生の無有出離之縁と一体となった無縁大悲である。即ち、絶対に助からない我が身の根本主体となって、我を内から目覚めさせるのが大悲の用きである。

浄土の開示（山高）

阿弥陀如来がどこかにおられて、ただ有難く仰ぎ見るとい
うだけでは、敬虔な気持ちはあるとしても、救いの現実性や
確実性はあるとはいえない。如来が、その大悲の故に、法蔵
として、我の内に身を捨て、根源的な主体となることによつ
て、初めて、衆生の上に明確な自覚、機の深信をもたらす。
それを衆生の側から言えば、我の宿業の痛みを通して、そこ
に如来の大悲を感得するということである。そこに、凡愚の
自覚が即座に如来の讃仰をもたらしという自覚道が成り立つ
のである。

親鸞は、続けて、如来の大悲心の自証を、

斯^ノ心者^ハ即如来^ノ大悲心^{ナルカ} 故^ニ必ス成^ル報土^ノ正定之因^ト一

〔定本教行信証〕一一二頁

と、衆生に浄土を開示するものとして捉える。信樂は、如来
の大悲心であるから、機の自覚にとどまるだけではなく、そ
こに「必^ス成^ル報土^ノ正定之因^ト」という、浄土への開けを有
するものである。どうしても往生不可という、絶体絶命の悲
しみにおいて、如来の大悲に出会い、浄土が開示される（『本
願の仏地』『曾我量深選集』第五卷・弥生書房・二八二頁参照）。即
ち、いかにしても浄土に往生できない我が身であるという自
覚において、逆説的に、無量光明土が開示されるのである。
親鸞に、このような体験的浄土理解をもたらし、その道理を
推求させたのは、「真仏土巻」に引用される『論註』性功德

であろう。特に注目すべきは、曇鸞の如来の大悲についての
了解である。

慈悲^ニ有^リ三縁^一一者衆生縁是小悲^{ナリ}二者法縁是中悲^{ナリ}三者无縁
是大悲^{ナリ}大悲^ハ即是出世^ノ善也、安樂浄土^ハ從^ニ此^ノ大悲^一生^{セルカ}
故^{ヘナレハナリ}故^ニ謂^{ヒテ}此^ノ大悲^ヲ爲^ス浄土之根^ト故^ニ曰^{フナリト}出^ニ世^一善
根生^ト一

〔定本教行信証〕二五一（二頁）

曇鸞は、衆生の無有出離之縁と共に悲しみたまう如来の大
悲心こそ、安樂浄土の根であると言う。この曇鸞の教示によつ
て、大悲心が「報土^ノ正定之因^ト」であることが明確になる。
つまり本願成就の根源的な主体と、浄土を建立した主体とが
同じ大悲心だからこそ、今、凡夫の身のままに、報土往生の
感動を賜るのである。

三 本願信心の願成就

このような大悲心のはたらきをふまえて、親鸞は、信樂釈
において、

如來悲^ニ憐^{シテ}苦惱^ノ群生海^ヲ以^テ无碍廣大^ノ淨信^ヲ一^ニ回^ニ施^{シタマヘリ}
諸有海^ニ一^ニ是^ヲ名^ク利他眞實^ノ信心^ト一
本願信心^ノ願成就^ノ文^ニ『經^ニ』言^フタマハク諸有^ノ衆生聞^テ其^ノ名號^ヲ一^ニ信
心歡喜^{セムコト}乃至一念^{セムト已}
又言^{ハク}他方佛國^ノ所有^ノ衆生聞^テ无量壽如來^ノ名號^ヲ一^ニ能^ク發^{シテ}一念^一
淨信^ヲ一^ニ歡喜^{セムト已}
〔定本教行信証〕一一二（二頁）

と、自らに獲得された信心が、本願の成就であると述べる。

如来は、「悲^ニ憐^{レンシテ}」苦惱ノ群生海^ヲ、「无碍廣大ノ淨信^ヲ」を我らに回施したまいた。つまり、群萌の大地に法蔵菩薩となつて身を捨て、群萌の苦悩を我が苦悩としてはたらしかけけるのである。ここに、絶対に助からない我が身の根本主体として、大悲心が見出されてきたのである。信樂釈における徹底した機の自覚は、大悲心の成就にはかならないのである。

まとめ

至心釈においては、回心懺悔の体験の根底に法蔵菩薩の願行が真実心として見出されたが、信樂釈では、さらに、法蔵菩薩のはたらきが、「此必不可也」という往生の否定を通して、群萌と大悲共感したまう如来の大いなる悲しみ、大悲心として見出された。

そして、信の根源である大悲心が、実は浄土を生み出す根源でもあるから、穢土の只中において、浄土が開示されるのである。信の成就是、必ず浄土への開けにおいてある。衆生における信の成就是、助かりようのない自己の発見であるが、それは同時に、無量光明土としての浄土の中にある自己の発見なのである。

〈キーワード〉 親鸞、『教行信証』、機の自覚、大悲心、浄土
(大谷大学大学院)

浄土の開示(山高)

新刊紹介

中西 随功

『證空浄土教の研究』

A五版・四四六頁・本体価格九、五〇〇円
法蔵館・二〇〇九年三月